

園のおたより



第 10 号

令和7年2月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

鬼になって

園長 関 由紀子

幼稚園の園長のおしごとにはいろいろありますが、中でも一番痛いおしごとは、節分の「鬼」になることです。大変な役ではありますが、結構これが楽しいのです。3歳児、4歳児、5歳児それぞれの鬼に向かう様子がとてもおもしろく、役職特権だとおもいます。昨年、我が娘に「幼稚園で鬼になる」と話したところ、「見たい！見たい！」と大はしゃぎ。娘が保育園児だった時の節分の写真は、鬼が怖くて大泣きしているものばかりです。きっと、娘はその頃の仕返しに私の鬼の姿を笑ってやりたいと思ったのでしょう。

今年の豆まきも、自然観察園で盛大に行われました。3組さんの投げる豆は、顔に当たると結構痛く、日頃の遊びの成果が見られます。園長と副園長が鬼と知りつつ、鬼が向かっていくと怖がり怯む姿はとてもかわいらしいです。2組さんは鬼への立ち向かい方は真剣です。必死に豆を投げつけるのですが、顔にはあまり届かず痛くありません。そして手持ちの豆がなくなると、鬼の私に「豆がなくなった」と催促する姿がとても微笑ましいです。1組さんは鬼への怖がり方は真剣そのものです。鬼が向かっていくと必死に豆を投げるのですが、私の腰のあたりでパラパラあたって落ちていきました。自然観察園から教室に戻るとき、Aさんは私と手をつなぎ歩きながら「鬼はどこにいったのかなあ」と聞いてきました。「豆をぶつけられて、あっちのほうに逃げたかな」と答えつつ、なんて愛おしいのだろうと感じました。

大人になると、季節の行事が疎かになりがちです。行事を通して日本の伝統的な文化を感じることは、アイデンティティ形成にとっても重要なことだと認識いたしました。そして節分では、園児の「鬼は外、福は内」を聞き、平和で豊かな年になるよう願わずにはられません。

豆まきのあと、園長室に戻り上着を脱ぐと、あちらこちらに挟まっていたり、入り込んでいたりした大量の豆が、バラバラ落ちてきました。その後2日間ほど、ポケットやフードの中、襟の間などから豆が落ちてくるのを見つつ、今年も鬼役をがんばったなあ、としみじみ感じました。



さようなら

副園長 小谷 宜路

先日、目にしたある記事に、「さようなら」というあいさつについて、こどもの頃に学校で使って以来、大人になるとほとんど使わなくなっているという内容がありました。確かに私も、園の子どもたちや保護者の方たちと別れるときには「さようなら」のあいさつをしています。他の大人の方との間では、「ありがとうございました」「失礼します」「ごめんください」「では、また」「じゃあね」などといった言葉で、日常生活を送っているように思います。

もう一つ、最近、耳にした話です。とある研修会にて公立小学校の元校長先生が、5歳児（いわゆる年長さん）の小学校入学前について、次のような話をされました。「（ランドセルなどの用品のことを除いて）小学校に向けて何か特別な準備をする必要はありません。幼稚園、保育園では、卒園の最後まで、しっかり遊びきってきてほしい。そして、その園を卒園してきた誇りをもって小学校に入学してくれば大丈夫です」という話でした。

「さようなら」の語源は、「さようならば」「そうであるならば」と言われています。単なる別れの言葉というよりも、ここまでであったことに、きちんと一つ区切りをつけて、次に向かうというような印象を受けます。幼稚園で毎日帰る前に、「さようなら」とあいさつすることを心がけていますが、子どもたちにとって、いろいろなことを体験し、心動かした園での生活に、丁寧に区切りをつけている「さようなら」なのかも知れません。その「さようなら」には、次の生活、例えば帰った後のおうちでの生活や、翌日の園での生活に、気持ちを向けていく意味も含まれているのだと感じます。

毎年3月には、修了証書授与式（卒園式）があります。この日の3組さんとの「さようなら」は、不思議な気持ちになる「さようなら」です。毎日交わしてきた「明日の園生活も、またよろしくね」という気持ちを含んだ「さようなら」とは異なり、「幼稚園生活をすっかり楽しんだから、もう大丈夫」という気持ちを重ねた「さようなら」です。上に紹介した元校長先生のお話のように、附属幼稚園を卒園していく人たちにも、「幼児期をちゃんと遊びきったね」という気持ちで、「さようなら」のあいさつを交わしたいと思います。

もちろん1組、2組の人たちも、残りわずかな今年度の園生活の中で、今の遊びを遊びきって、今年度の最終日には、それぞれに区切りの「さようなら」をしたいと思います。





1くみ



「自分を表現する」

先日のともだち会では、こどもたちの姿をあたたく見守っていただきありがとうございました。何回寝たらお家の人が見に来てくれるかを数えながら、当日を楽しみにしていました。たくさんの人の前で表現することにどきどきする気持ちがありながら、自分の姿を見てもらうこともとても嬉しかったようです。

1組で過ごしてきた1年の中でたくさんのお話や歌に触れてきました。絵本を読むと、「紙芝居はあるの?」「この後どうなったんだろう」など、絵本には描かれていない部分がどうなっているのかと思い巡らせる姿がありました。その中でも、「手袋はどうなったのかな?」「おじいさんはどこにいったんだろう」と、お話の中には描かれていない部分が特に気になるような姿が多かった『てぶくろ』のお話を3学期にもう一度紹介し、みんなでお話の世界を表現してみました。まずは、絵本を見ながら出てくる動物になって動いてみることにしました。お話を始めようとする、「手袋は壊れちゃうんだよ」と絵本にはないアイデアが新たに出てきたので、そのお話をみんなで進めていきました。お話が終わると、「次はね、手袋がマンションで壊れちゃうんだよ」「ネコも出てくるんだよ」「パンダもいるんだ」など、どんなものが出てきたら面白いかを嬉しそうに話し、それぞれのアイデアを取り入れながら、動きや言葉で表すことを繰り返し楽しみました。体の動きで動物を表現する人、鳴き声を出してみる人など一人一人がイメージしたことを思いのままに表現しており、一人一人がどんな世界を見ているのか、どのように感じているのかが異なるからこそ、みんなで表現するといろいろな表現が合さり、より面白いものになっていくのだと感じました。

表現をする上で、みんなで揃える、一緒にやるという面白さもありますが、まずは、自分が感じたものを思いのままに表現する、友達のいろいろな表し方に触れることで一人一人の世界も広がっていくのだと思います。1組での生活も残りわずかとなりましたが、それぞれの感じたこと、表していることを大切にしながら過ごしていきたいと思ひます。



2くみ



「春の色 歌の色から」

花壇にみんなで植えたチューリップやヒヤシンスが芽吹いてきました。水をあまり欲しがらずに寒々としていた土は、冬を過ごす中でも、陽や風や霜、蓄えたエネルギーとともに循環していたことを感じます。

さて、『歌の町』をともし会で歌いました。この歌が作られた、あの頃の楽しい町のことについて副園長が話してくれたことから、わたしが知らないその頃の人々の暮らしについてぼんやりと考えました。電気がぴかりと灯してくれる幸せな家の中、ボンボンと絶えずに刻む時計の音。色のない世界を見ていた人が、自然に囲まれた四季折り折りの色の世界の中で暮らすことがどれだけ幸せなことでしょう。また、よく動いてよく笑ってよく泣いてよく怒るこどもたちの素直な感情が表に出ることが、自然なこととして目に耳に入ってくるような、感情の彩の世界がどれだけ素敵に見えたことでしょうか。1組が見せてくれた『てぶくろ』は他国の民話ですが、あの国に暮らす人はどんな色が見えているのだろうかとも想像します。

先日、美しい色をした空を見上げて、もっと高いところから見ようと、園庭にあるやぐらに登った人がいました。「せんせい！この青が好きなんだよ」と教えてくれました。誕生日に空の色だから青が好きと話してくれた人です。その時に、教育学部の岩川先生が「あの子の言う赤とんぼの赤は、本当に私の想像する赤の色なのか」と問いかけてくださったことを思い出しました。その人の世界に身を浸して、その人の世界から何が見えるのかをよく見て聴いて感じる大切さを教えていただきました。わたしは、あの子の好きな青のことが分かってとっても嬉しかったです。そしてそれを伝えようとしてくれたあの子との心のつながりを感じたことが嬉しかったのだと思います。

紫はきれいな色だから好きと言ったあの子も、黄色が大好きと言ったあの子も、白があったかい感じがするから好きと言った人も、毎日たくさん「好き」を教えてくれました。お母さんが作ってくれる餃子が好きと教えてくれたあの子の言葉から、「ぼん酢が美味しいよ」「醤油で食べているよ」「酢で食べると美味しいらしいよ。わたしは酸っぱいから食べないけれど」というそれぞれの「好き」を話題にする中で、それぞれの違いを知る機会にもなりました。

一人一人のもち味の違い、感じる色の違いをお互いに持ち寄りながら、楽しい楽しい2組の一年の暮らしがありました。素敵な出会いに感謝しています。



3くみ

「自分のもの、自分事として」

先日のともだち会当日、生き生きと表現する3組の人たちの姿がありましたが、それまでに様々な活動を積み重ねてきた中で、お話の表現や楽器の演奏を自分たちのものにしていきました。劇ができるまでの様子をご紹介しますと思います。

きっかけは、12月のこども会で演奏する「トルコ行進曲」について、どんな音色で演奏しようかと3組のみんなで相談している時のことでした。曲中のフレーズが、いろいろな動物が行進しているように聞こえたので、一つ一つのフレーズに動物と楽器の音色を当てはめていきました。すると、「お面を着けて、みんなで劇をしたら楽しいんじゃない？」と話す人がいました。きっかけは一人の一言でした。ですが、3学期に入って劇を作ることを話題にすると、お話に関するいろいろなアイデアが出てきて、3組のみんなのイメージの中で、あっという間にお話が出来上がりました。次は物語に登場する“伝説の食べ物”をみんなで力を合わせて作り進めました。“伝説の食べ物”は一つ一つが大きく、簡単に作ることはできませんが、少しずつ作り進めたり、みんなで分担して色を塗ったりして、形にすることができました。どれもこどもたちが一つ一つ丁寧に作り進めたものです。物を作り上げていく過程でイメージの中のお話が目に見える形になっていきました。その楽しさから、今度は実際に自分たちが登場する動物になって劇遊びを始めました。最初はセリフや動きも手探りで、一つ一つ相談しながら進めました。きっかけは楽器の分担奏と一人の一言でしたが、活動を積み重ねていく内に3組の一人一人が自分事として楽しみ、動きや言葉での表現が自分たちのものになっていくのが感じられました。

幼稚園で過ごす一日一日のあらゆる出来事が、大切な一人一人がいたからこそ経験できたことだったのではないかと思います。27人がそれぞれよさを発揮した1年でした。一緒に時を過ごせたことをうれしく思います。

